

かのくに
迦国あやかし後宮譚2

シアノ Shiano



アルファポリス文庫

第一章

薫春殿くんしゅんてんに爽やかな新緑の風が吹き込んでいた。

時が経つのは早いもので、私が後宮に来るきつかけとなった宮女試験きゆうじょしよの頃はずいぶん寒かったが、そろそろ日向ひなたにいればうつつすら汗ばむ陽気になっていた。

雨了うりようが反乱の気配ありと迦国かこくの属国、馬理国ばりこくへと親征しんせいして、もう半月あまり。馬理は遠く、後宮にはまだ何の連絡もない。

——雨了は無事だろうか。今頃何をしているのだろう。

私は窓から見える眩まぶしい庭に目を細めた。雨了の出立しゅつたつの頃に咲いていた花は落ち、今は違う種類の花が咲き誇うたかっている。薫春殿の庭もすっかり様変わりしていた。

失ってしまった雨了の鱗うろこを探し出さねばならないのに、何の手がかりもないまま日々だけが無為に過ぎていく。龍とその番つがいに絆きずながあるのなら鱗は私の掌中てうちゆうに戻ると、

そう壁龕は言った。なのに、私の手に鱗はなく、無力なまま。

ついいつもの癖で胸元に手を当てたが、祖父の形見はそこにはない。今は遠く離れた雨了のもとにある。指に触れるのは、雨了を人の体から解放するための龍の宝刀が変化した、あの細長い巻貝の冷たい硬さだけだった。

「朱妃、献上された品々が届いております。ご確認よろしいでしょうか」
ぼうっとしていた私は急に金苑から話しかけられ、慌てて顔を上げた。

「あ、ああ、うん。目録を見せてくれる？」

「お疲れのご様子ですが、一旦休憩なさいますか？」

「平気よ。お茶の時間までに終わらせたいから」

雨了はいなくとも、いや、むしろいい時を狙っているのだろうか。愛妃である私への献上品は日に日に増えていた。雨了の親戚や高官、具令といった、寵愛を受ける妃とよしみを通じたい人々からの贈り物だった。非常に面倒くさいが、そういった品々を確認し、礼状をしたためるのも妃の仕事の内である。

とはいえ中身は既に宦官たちが検めているので、私は目録と共にチラッと確認する程度だ。献上品はいかにも女性が好みそうな衣服や装飾品が多い。そういうものに

さして興味のない私には少しばかり食傷気味だ。

「絹に装飾品……いつも通りね。金苑、そっちの箱を開けてくれる？」

「はい、かしこまりました。——ッ！」

私が指示した桐箱の蓋を開けた金苑の手が、ピクッと弾かれたように離れた。

「どうしたの？」

「なんでもありません。大変失礼いたしました」

しかし金苑はすぐにもいつもの通りの冷静な態度に戻って、再度蓋を開ける。

中には大ぶりの石が入っていた。楕円の大きな石。その一箇所が割れて口を開け、キラキラした紫水晶が覗いている。そういう調度品のようだ。

特別おかしなものには見えず、首を傾げた。

「なんでもないって風じゃなかったけど。箱に虫でも付いてた？」

今のはどう考えても金苑らしくない態度だった。

この薫春殿には年齢不詳な汪蘭を除き、私と歳の近い若い宮女しかいない。金苑も私より幾つか年上だけで随分若い、薫春殿の宮女たちのまとめ役をしてきている。仕事の采配も完璧な、薫春殿一のしっかり者の宮女だ。常日頃から冷静で、感情

をあらわにすることは多くない。

だからこそ、いつもと違う態度が気になった。まさか淀みに憑かれてはいないかとじっと見つめたが、あの黒い霧は彼女のどこにもなかった。

ただの杞憂かもしれないが、念には念を入れておきたい。

「何か変なことでもあったら、些細なことでも、なんでも言つてちょうだい」

「……いえ、本当になんでもありません……」

しかし金苑は言葉を濁して目を伏せる。その視線は手元の箱ではなく、どこか遠くを見ている。その様子はまるで先程の私のようなようだ。

そろそろお茶の時間だ。献上品の確認も区切りがいい。今日はここまでにしておうと、私は目録を閉じ、首をぼきりと鳴らした。

「――石は……何だか恐ろしい気がします」

金苑が不意にポツリと呟いた。

その視線は、未だ水晶の調度品が入っていた桐箱に落ちたまま。

「石……?」

私は目をパチクリとして金苑に聞き返した。

夏と呼ぶにはまだ早く、けれど日差しが強まったのを実感する時期だ。薫春殿の外に一歩出れば、この季節の緑は色濃く、朱色に塗られた宮殿をいつそう鮮やかに際立たせている。だからこそ、硬く温度の失せた金苑の言葉が、私の心に、それこそ石ころのように引つかかったのだ。

金苑は思わず零してしまった言葉を呑み込むことも出来ず、不安げな子供のようにうろろると視線を彷徨わせている。やはり金苑らしくない。

「ねえ、もしかして、それって石林殿のこと?」

ふと思いついたのは、薫春殿と因縁浅からぬ石林殿の胡嬪。その住まいの名前からして『石』である。

彼女は私の腹違いの姉、朱華の主人であり、なんとも風変わりな人物なのだ。胡嬪本人だけでなく、石林殿の宮女もどことなく薄気味悪かったのを思い出す。

それだけならはいざ知らず、朱華は少し前に薫春殿の宮女、恩永玉を脅したのだ。石林殿に良い印象などあるはずもない。

金苑は大切な友人の恩永玉を傷付けられ、普段の冷静さが信じられないくらいに激しさで、それはそれは怒っていた。もしかして石を見て連想してしまったのだろうか。

そう思ったのだが、金苑はゆるゆると首を横に振った。

「……それもありますが、私は元々石が少し苦手なのです。なので少し驚いてしまいました……」

金苑はいつも冷静で、怖いものなどなさそうな有能な宮女だ。そんな彼女の苦手なものが思いもよらぬ石であるとは。

ついつい興味が湧いてしまうのは致し方あるまい。

「その石って、石ころとかの?」

「そうですね……石ころだけでなく玉石の類も、少し苦手です」

金苑は菌切れ悪く答えた。

私は金苑の姿を見る。若い宮女はお仕着せの着物ながら、玉のついた髪飾りや帯玉で小さな洒落を楽しんでいる。

金苑もそんな他の宮女と同様、艶やかな髪飾りや帯玉を着けている。今も決して派手ではないが、上品で美麗な帯玉が身動きする度揺れていた。

私の視線に気が付いたのか、金苑は帯玉を手で拗うように持ち上げた。

「ああ、これは玉石ではないのです。これは鬘甲に螺鈿を施したものですし、髪飾

りにしても玻璃や真珠などが多くですね。玉石の類も全くないわけではありませんが、あまり……」

「へえ、本当に苦手なのね。なんでまた……理由とかあるの? ああ、言いたくないならいいんだけど。ただの好奇心だから」

「いえ、構いませんよ。ただ幼い頃に親族の者から、石が囁きかけてきたら気を付けなさいと言われて……それが子供心にとっても恐ろしく感じたものですから。石の範疇に入りそうな宝玉まで含めて少し苦手になってしまつて——」

石が囁くときた。

私はちよつと不意を突かれ、目を瞬かせる。

「まあ、その話、私も聞いたことがありますよ。王宮内に古くからある怪談ですよね!」
ちよつどお茶を持ってきた宮女が、目を輝かせて話に乗ってきた。

薫春殿にいるのはどちらかと言えは大人しい宮女ばかりだが、それでも数人寄ればそれなりに姦しい。しかも怖い話というのは女性の興味を煽るものらしい。まあ私として例外ではないが。

「怪談ねえ。どんな話なの?」

「そんなに怖い話ではないのですが、龍圭殿りゅうけいでんにある宝物庫には一人で入ってはいけない決まりがあるそうなのです。……石が話しかけてくるから、と。確かそんな話でしたよね？」

宮女きゆうじよは声色を変えておどろおどろしく言い、金苑はどこか浮かない顔のまま頷うなずいた。「へえ、あの龍圭殿の話なのね」

龍圭殿といえは儀礼用の宮殿で、かつて私がすつ転んで大きなたんこぶをこしらえた場所だった。伝統ある宮殿だから、そんな話の一つや二つあるのだろう。

「……ええ。一人で宝物庫に入ると石が囁ささきかけてくる。それに返事をしたら死んでしまうというお話です」

「あら、そうでしたかしら。私は願いが叶うと聞いた気がしますけれど」

宮女きゆうじよは首を傾かしげている。私はつい口を挟くさんだ。

「まあでも、噂話うわさってそんなものじゃない？ 伝わる内に、いつのまにか少しずつ変わってしまったりするのよね」

金苑はコクンと頷うなずく。

「そうかもしれません。私の大叔母もかつて宮女きゆうじよをしておりました。その大叔母から

聞いた話では、囁ささく石が願いを叶えてやろうと唆そとすけれど、願いは叶わずに死ぬことです。だからそんな声を聞いても絶対に返事をしてはならぬと。大叔母の若い頃のことなので随分昔の話なのですが、今でもその決まりは変わらず、二人以上でなければ宝物庫には入ってはならないそうですよ」

「一人では入ってはならない宝物庫……」

豪華な宝物庫で、自分一人しかないというのにどこからともなく囁ささきかけてくる声。確かに想像するとうっすらとした怖さがある。幼い金苑はそれを聞いて震え上がったのだろう。

金苑はそんな過去を振り払うように苦笑した。

「いえ、宝物庫ですから、実際のところは、盗難がないように、複数人でないと入れない決まりにでもなっているのでしょうか」

「なるほどね」

説得力のあることを言われると途端に納得してしまう。金苑はこれで終わりというように仕事に戻っていった。

もう一人の宮女きゆうじよはまだ話し足りないらしく、私に新しいお茶を注いでから口を開く。

「でも、龍圭殿って、色々耳にしますよね。やはり何かあるかもしれませんよ！ そのういえば、この春にも死体が見つかったとか——」

言いかけた宮女は私を見てハッと顔色を変え、口をつぐむ。

「な、なんでもごいません。……失礼いたしました」

そういえばそうだった。

たんこぶを作ったことばかり覚えているが、あの龍圭殿では肉体の一部だけが動いている世にも悍ましい妖を目撃したことがある。後日、雨丁に調べてもらうと龍圭殿の床下から行方不明になっていた衛士の白骨死体が発見された。それが何故か私が幽霊の声を聞いて見つけたという噂になってしまっているのだ。

それに、あの頃の教育係だった宦官の梅応が火輪草の件で捕縛されたこともある。きっと宮女たちも触れてはならないことなのだと感じているのだろう。

「別に気にしてないから」

「そ、そうですね。あ、あの、先日の茉莉花の香の件なのですが——」

ホツとしたように宮女は話を変える。

「ああ、それね。使ってみてどうかしら」

私だってあの話を蒸し返したくはない。やや強引にでも話を変えてくれた宮女に感謝し、香の話や菓子の話でしばしの間、盛り上がる。

——しかし、心に引つかかった石の存在を、忘れることは出来なかった。

花の咲き誇る薫春殿で、このところ生花以外の香りが立ち込めていた。

茉莉花の香である。

壁薔が教えてくれた通り、清らかな花であるという茉莉花の甘やかな香りは淀みをおかせ付けず、香を焚くだけで薫春殿内で淀みを見ることが随分と減っていた。

おかげでろくも狩り続けて減った体力を回復させたよう、室内に入ってきた淀みを今日も元氣いっぱい狩り続けてくれている。

壁薔の情報はずしかった。淀み避けとして効き目があるとはっきりしたことになる。

「朱妃——あら、こちらの部屋は香を焚いていないのですね」

そう言っ入ってきたのは汪蘭だった。

「ええ。猫がいる場所には香を焚きすぎるのは良くないそうだから」

ろくは妖であるために茉莉花の匂いが苦手なのだ。なので私の部屋にだけは香を

焚たいていない。私には淀よどみが見えるから不用意に触れてしまうこともないし、ろくも基本的私の部屋にいる。もし淀よどみがいても、真まっ先に退治たいちしてくれる。

しかしふと思いつく。

「そういえば汪蘭も茉莉花まつりかを嗅かいでくしゃみしてたわよね。大丈夫なの？ 体質たいしつに合わないなら無理無理して使つかわないでね」

いくら淀よどみ避けよけとはいえ、苦手なものを無理強じいさせては意味がない。

「ええ、香かりが嫌よいなわけではないのですが……どうにも鼻はながムズムズしてしまいますね。ですが、最近少し香かりが変わった気がします」

「あら、気が付いた？ 茉莉花まつりか以外にも匂にお天竺葵てんじくぎを混ぜているの。……その、このところ宮女みやひめの心身の不調が多いでしょう。香かで心を安らげるのが良いと思って」

対外的にはそう広めている。淀よどみがどうとは言えるものではない。

さらには改良を続け、元々魔除けとしても使われる匂にお天竺葵てんじくぎの香かをほんの少しだけ足したところ、なんと淀よどみ避けよけとしての効果が増したのだ。おかげで薫春殿の宮女も今のところ無事だ。かつて淀よどみに憑つかれ、体調を崩した恩永玉もすっかり回復している。

「他の妃嬪ひひんがいる各宮殿にもこの香かを広めてもらってるの。苦手な汪蘭には申し訳ないんだけど」

「まあ、私のことなど気になさらないでください。朱妃しゆひが宮女みやひめの健康に良いとお考えなのでしよう。それはとても大事なことです」

「うん。でも汪蘭だって大事よ。どうしてもしんどかったら私の部屋に來ればいいから」
「……はい。その際は、お言葉に甘えさせていただくかもしれません」

汪蘭は柔らかに微笑む。

私の言うことをどれだけの妃嬪ひひんが信じて香かを使つかってくれるか分からない。しかしそれで少しでも淀よどみに憑つかれる宮女みやひめを減らせるかもしれないのだ。とにかく試してみるしかない。

とはいえ嗅覚が鋭すぎる雨了まつりかは茉莉花まつりかをキツく感じるそうなので、どちらにせよこの作戦が出来るのは雨了まつりかが帰るまでの時間稼ぎにすぎない。

私が本来やるべきなのは雨了まつりかが親征しんせいから帰還するまでに鱗うろこをどうにかして見つけ出すこと。雨了まつりかに鱗うろこが戻り、後宮における龍の力の循環が滞どりなくなれば淀よどみも減るはずだし、雨了まつりかの寿命も長くなるはずなのだ。

しかし鱗は未だ見つからない。どこを探せばいいのか見当も付かないまま。やるべきことの手がかりさえない。今こうしている間にも気ばかりが急いでしまう。

私は胸元に手を当てて重い溜息を吐いた。そこに祖父の形見はないが、つい手で探るのがすつかり癖になってしまっていた。

「朱妃、どうかありませんか？ 胃の調子が芳しくないのでしょうか」

そんな私を心配して汪蘭が聞いてくる。私は慌てて否定した。

「ううん、大丈夫。なんでもないわ」

「さようでございますか……皇帝陛下が早く戻られると良いですね……」

「……そうね」

私の元気がない原因を、雨了が長く留守にしているせいだと汪蘭は思っているようだ。

勿論それもある。私は雨了に会いたくてたまらなかった。雨了は私の腹の立つこともするけれど、一緒にいる時は何だか心が自由になるような、晴々とした気持ちになるのだ。そばにいたい。温もりを感じたい。けれど今は我慢するしかない。

それより今の私は、雨了が死んでしまうかもしれないことがとにかく気がかりでな

らない。龍の力を制御出来なければ、そう遠くない内に雨了は死んでしまうのだから。汪蘭は私に寄り添い、そっと背中を撫でてくれる。心配してくれている汪蘭の気持ちが届くほど伝わってくる。

ついでまた溜息を吐きかけて、汪蘭をこれ以上心配させないようにと、ぐっと呑み込んだ。それから少しわざとらしいかもしれないが、明るい声を出して話を交えることにした。

「ねえ、そういえば汪蘭って、宝物庫に一人で入ってはならないっていう怪談を知ってる？ 石が嘔くってやつ」

先日、金苑たちとの話で知ったばかりの怪談だ。汪蘭は薫春殿の他の宮女より宮女経験が長いようだから、もしかすると金苑たちよりも怪談の詳しい事情なんかも知っているかもしれない。汪蘭がこの怪談を知っていても知らなくても、きつと話が盛り上がるだろう。

そう思って話を振ったのだが、汪蘭は返事をしない。

会話はふつつりと途切れ、静まり返った部屋の中で汪蘭がひゅつと息を吸う音だけが私の耳に届く。

「えと、汪蘭、どうかした？」

何か変なことを言ってしまったのだろうか。

「……それを……誰から聞いたのですか」

しばらくしてようやく返ってきた汪蘭の声はひどく掠はずれていった。

振り返ると、汪蘭は目を見開き、指も微かかに震えている。顔色は紙のように真っ白だった。

「ど、どうしたの汪蘭……?」

軽い気持ちで言ったのに、私は汪蘭の過剰すぎる反応に少なからず驚いた。たかが怪談にそんな反応をするとは思ってもみなかったのだ。

「まさかどなたかが、一人で宝物庫に入ったのですか!？」

滅多にない汪蘭の剣幕に私はブンブンと首を横に振った。

「い、いえ……金苑の大叔母が昔、宮女きやうじよをしていたらしくて。た、ただの噂よ」

「そ、そうでしたか……」

汪蘭はそれを聞いてほうっと息を吐いた。ひりついていた空気が緩む。

「ねえ、ただごとではなさそうだけど」

「……あまり良い話ではありません。十年前にも同じ怪談が広まったことがあったのです。願いが叶う石があるからと、願掛けをするために実際に龍圭殿に忍び込んだ衛士きやうじしよや宮女きやうじよがいたそうで……」

確かにそれは問題だ。いくら願掛けだろうが、宝物庫に侵入しようとすれば騒さわぎになるだろう。下手をすれば御物ごぶつを盗ぬすもうとしたとされ、極刑でもおかしくはない。

「分かった。それについては他の子たちにもしっかり釘を刺しておくわ」

「はい、よろしく願ねがいします」

汪蘭はまだ顔色かほいろが優やされない。

伏せた瞳は悲しげに揺れていた。何か訳ありな様子なのは一目瞭然だ。

(……変な汪蘭)

更に問うべきか——そう考えた時、部屋の外から私を呼ぶ声が聞こえた。

「朱妃、お手紙が届いております。少しよろしいですか」

「はいーい！ ねえ汪蘭、ちょっと待ってて」

「……いえ、私のことは、どうか気にならさないでください」

汪蘭は静かに微笑み、部屋から退出していった。

部屋に残った私は石林殿からという手紙を前にうーんと唸る。鉛のように艶やかな材質の文机に置かれた簡素な手紙は、何だか白い石を連想させる。つい先程の囁く石の話を思い出してしまっていた。

「石林殿の胡嬪への返事はどういたしましょう」

汪蘭と入れ替わりでやってきた金苑がそう尋ねてくる。

なかなか開く気にならずにぐずぐずし、ようやく開いた胡嬪からの手紙は石林殿への招待状であったのだ。

私の位は妃で、彼女は嬪である。妃の方が位が上になるので、誘いの手紙といっても強制的に行かなければならないなんてことはない。断るのも自由だ。しかし、少し前の恩永玉の件もある。

「ねえ、使いの宮女って朱華だったの?」

「いえ、違う宮女でした。その朱華のことで胡嬪がお話があるとのことですよ」

私は少し考え込んだ。罨かもしれない。それを考えれば敵地である石林殿に行くのは危険だ。例えば最初に青妃の青蓋宮に行つた時のように。青妃は私に悪意を持つ

ていなかったから、ただの悪戯で済んだ。だが、もしも胡嬪に悪意があるのなら、私を閉じ込めるなり、随伴の宮女を人質に取るなり、なんだって出来るだろう。今は雨が不在だから尚のこと。親しくしているわけでもない胡嬪を信じ切れないのは事実だ。しかも、あの朱華の主人なのだ。だが行かないことで朱華についての話を聞き逃すのも、何だか心配だった。

「……ねえ金苑、薫春殿に招くという形にしても大丈夫かしら」

「ええ、勿論でございます。そうなればもてなしの準備がありますし、あちらとの予定をすり合わせますので、今日中は難しいでしょう。早くて数日後になります」

「しばらくは特に予定はないから、金苑たちに任せるわ」

「かしこまりました」

金苑は常と同じくごく冷静なように見えたが、胡嬪の宮女である朱華に仲の良い恩永玉を虐められた怒りは、今もその瞳の中で静かに燃えていた。

きつと金苑に任せれば、胡嬪の来訪にもなんら問題がないように段取りをしてくれるだろう。

金苑が胡嬪の宮女と予定をすり合わせ、胡嬪の来訪は二日後の午後と決まった。それまでに掃除やもてなしの準備を済ますべく、薫春殿はばたばたと慌ただしくなる。

そんな中、私は恩永玉を呼び出した。

「あの、お呼びと伺いましたが……」
恩永玉はおどおどと私の方を窺っている。その様はまるで小動物か何かのようか弱い愛らしさがある。

けれど、その細腕でも、私が与えた罰の水汲みや草むしりの力仕事もきちんとこなしていたのを知っている。本来とても真面目で良い娘なのだ。

「金苑から聞いたかもしれないけれど、明後日に石林殿の胡嬪が訪れる予定になっているの。あちらも宮女を連れてくるでしょうから、もしかすると朱華と顔を合わせる事になってしまうかもしれない。……それで、恩永玉はどうしたい？」

「どう、とは……」

「もし朱華の顔を見るのも嫌なら、当日は裏方の仕事で構わないけれど」

私の言葉に、恩永玉はきゅつと唇を引き結び、真剣な面持ちをして首をプルプルと

横に振った。

「いいえ、出来ることなら私も朱妃のお側に置いていただきたいです。私は一度朱華の言葉に屈してしまいました。朱妃はそんな私を許してくれましたが、だからと言ってこのまま逃げて良いはずありません」

「大丈夫なのね？」

「はい。もう朱華の言葉に惑わされません」

「それじゃあ、当日は金苑と共に私の側に付いてもらおうね」

「はい、お任せください！」

恩永玉は両の手をきゅつと握り込んで大きく頷いた。

真面目ではあるが少し気弱で大人しすぎるくらいがあつた恩永玉が、芯の強さを見せたことが、自分のことのように嬉しくて誇らしかった。

「それから、恩永玉の実家の方はどうなの？ あれからまだ連絡とかはない？」

「……そうですね。私の方から仕送りをしたので当座は凌げるかと思えます。吹けば飛ぶような小さな商家ではありますが、私の仕送りがあれば、妹や弟が飢えることはないでしょう……」

恩永玉の実家は商家であり、朱華のせいとはいえ一度大きく躰つまずければ商売はあつという間に負債を抱え、坂道を転がる雪玉のように大きくなってしまふ。恩永玉の態度からしてあまり芳かんばしくないのは察せられた。

恩永玉も心配だろうが、後宮にいては簡単に様子を見に行くことも叶わない。見舞金を私の方から送ろうかと提案したのだが、恩永玉から固辞こじされていた。

「ねえ、恩永玉。貴方あなたの実家の商あきまいって、遠方から食材を買い付けてきたりもするのよね」

私はふと思い付いて、そう尋ねてみた。

「え、ええ。そうですけど……」

恩永玉は私の言葉にキョトンとしたように首を傾かしげた。

「実は、仕入れてほしいものがあるのだけど」

「ああ、そういうことでしたか」

恩永玉は納得したように頷うなづいた。だが、あまり浮かない表情のままである。

「ただ、うちの店は使用人を含めても少人数の店ですので、あまり多くの品は扱えなくて。今回の負債も鮮度が重要な品を大量に発注されたのですが、その後音信不通に

されてしまったことが原因なのです。ですから、朱妃のお気持ちは嬉しいのですが、ご期待に添えるかは……」

朱華が恩永玉の実家に圧力をかけた際の詳しい話は聞いていなかったが、どうやらそういう事情であつたらしい。確かに一度騙だまされると店側も新たな客をなかなか信用出来なくなる。結果、行き詰まってしまうこともあるだろう。

しかし私はそれで諦めず、恩永玉の手をしっかりと掴んだ。

「いえ、だからこそ恩永玉を通したいのよ。ご両親も不安だろうから、先払いしても構わないわ。私はどうしてもろくにあの乾物かんぶつをあげたいだけなの！」

「あの乾物……以前に青妃の宮女きんゆうじよから頂いたものですね」

部屋の片隅で丸くなつていたろくも、自分の名前が出たからか、顔を上げて「じゅう」と小さく鳴いている。緑色の瞳を真ん丸にしてこちらを期待しているように見上げてくる。ろくはとてもお利口で人の話す言葉が分かるのだ。きつと美味しい物を食べられると勘付いたのだろう。

「ええ。あの魚の乾物を薄く削ってかけると、餌えさへの食いつきがすごく良くて。毎日頑張つてるろくに、ご褒美をあげたいから、是非とも手に入れたいのよ。食品だけど長

く保存出来るそうだし、ご実家の方にお願ひ出来ないかしら」
 たくさんあげるのは猫には体に悪いそうで、あげるのはごく少しではあるが、ろくがとにかく喜ぶ。

毎日淀みよどを狩るのを頑張ってくれていろろくのために、定期的に購入出来るようにしたい。そもそもろくは猫ではなく、妖まじなので、体に影響があるのかも分からないのだが。

「分かりました。そういうことでしたら父に取り寄せが出来るかの連絡をしてみます。確かなるべく塩気が少ないものが良いのでしたよね」

「ええ、そう。お願いね！ それから、お節介せつかもしれないけれど、恩永玉の実家に薫春殿で使っているのと同じ香を送りたいのだけど」

「あの邪気払いの香を……良いのですか!？」

茉莉花まつりかと匂天竺葵においでんじくあおいの香はいつのまにやら宮女きんじょたちの間で邪気払いの香と呼ばれるようになっていた。恩永玉の実家付近なら、外から淀みよどが集まってしまう後宮の中より少ないはずだが、気持ちこころが弱っている時ほど淀みよどに憑よかれやすいのであれば、この香が少しは役に立つかもしれない。

「他の宮女きんじょたちにも聞いて、希望があれば各自の実家に送ってあげようと思っているの。ちょうど良い調合の量を教えるから、いずれは自分たちで用意してもらおうと思うけれど。それで、実家が商家あきというなら丁度良いし、どうせならそれを売ってもらって、どんどん世間にも広めてほしいのよ」

現状、馬理国との間まに戦いくが起きる可能性があるということとは、これから世の中が荒れるかもしれないということだ。そうなればきっと後宮の外とにも淀みよどが増えることだろう。

朱妃愛用の香とでも宣伝をすれば多少は流行しそうだし、それで少しでも淀みよどに憑よかれる人を減らせるかもしれないなら、試す価値はある。

「は、はい。朱妃のご意向は理解しました。では実家にはそのように連絡をしてみます」
 「それだけじゃなく、恩永玉には今説明したことのまとめ役をお願ひしたいのだけど、良いかしら」

そう告げると恩永玉は目を丸くした。

「そんな、わ、私などに……もつと適任あての者が……」

「いえ貴方は実家が商家だからか、商あきないに関して知っていることが多いし、私には

適任だと思える。真面目でしつかりしている貴方なら任せられるわ」

私は私で、他の対処法も色々模索したい。手はいくつあっても足りないから、自分の仕事をしながらも手伝ってくれる宮女は本当に得難い存在なのだった。

「朱妃……ありがとうございます。私なんかで良ければ……いえ、なんとしてもご期待に添うべく、尽力いたします」

手伝ってくれる恩永玉へはこちらが感謝したいくらいなのだが、彼女は感激したように目に涙を浮かべ、手をプルプルと震わせて私の手を強く握ったのだった。

そして二日後、いよいよ胡嬪の来訪の日が訪れた。

金苑の指揮で完璧に整えられた薫春殿に、胡嬪とその宮女たちがやって来たのは約束の時刻ぴったりだった。

私も雨了が来る時のように全身を磨き上げられ、きつちりと化粧をされ、とっておきの着物も着せられている。少しでも威厳を高めるためだと金苑は言っていたのだが、私が良い着物を着たところで威厳が出るとは思えない。だが本気を出した金苑に口で敵うはずもなく、大人しく豪華な着物を着る羽目になったのだった。

随伴の宮女は朱華を含めて五名。胡嬪は形式通りの礼を取り、静かに私の前に座した。

朱華と、その隣にいる、能面のように肌を化粧で塗り固めた宮女には、背にべつたりと張り付いた黒い淀みが見えた。朱華の淀みは僅かな期間で大きくなっているようだ。

残る三人の宮女と胡嬪本人には淀みは憑いていない。だが、私のいる方からは見えないだけという可能性もあるのでまだ安心は出来ない。

ろくも今日はかりは別室に隔離で、今は汪蘭が面倒を見てくれている。汪蘭は薫春殿の宮女の中では年齢も年季も上だが、人前に出るのは苦手なようで、頑なに首を横に振られてしまったのだ。

それと言えば恩永玉も同じ気質のはずだが、恩永玉の方は今日はとにかく張り切っており、全く迫力のない顔で朱華を睨んでいる。残念なことに子犬の威嚇ほどの微笑ましいかわいさしかない。

胡嬪の宮女たちは全員が朱華に負けず劣らずの華やかな美女揃いだった。

顔だけなら我が薫春殿の宮女だって負けてはいない。しかし、宮女のお仕着せは

同じだが、あちらは各々が濃い化粧と色鮮やかな帯玉や髪飾りで色を添えているため、薫春殿の宮女よりもぐっと華やかさを感じる。

しかし以前禽舎でも会ったが、胡嬪本人だけではその中で全く異なった雰囲気的女性である。いや、周囲の宮女が派手——もとい華やかであるから余計にそう感じるのかもしれない。何せ彼女は一般的に地味と言われるような容貌なのだ。

決して不美人ではないのだが、言葉に困ってしまうほど特徴が乏しい。並顔の私からすれば、親近感を抱いてしまいそうな、平凡な顔立ちと雰囲気的女性だ。

体型も中肉中背。ほっそりと顎の尖った瓜実顔に自己主張のない目鼻立ちは上品といえは上品な類だろう。あまり表情を動かさないから、余計にそう感じさせるのかもしれない。

更には胡嬪の住まう石林殿を体現したかのような、翠がかった灰色の着物を着ていることもあり、何だか玉の中に混じった石みたいだと改めて思ってしまう。

立ち振る舞いは落ち着いているし、肌の質感などから私の年齢よりも少し上くらいだろうと察する。二十代半ばから後半であろう汪蘭よりは下に見える。そうであれば雨了や青妃と同年代なのかもしれない。ただ色味が少なく、地味に見えてしまう着物

のせいで、より年齢不詳に感じてしまうのだ。まるでわざと目立たないように装っているかのようだ。

話し始めてからもその印象は変わらない。静かで平坦な声色は、まさに宮殿の名の通り、冷たく無機質な石。しばらくは自己紹介から世間話などの他愛もない話をしていたが、いつまで経っても最初の印象の通り硬い石のまま、彼女の真意は全く掴めなかった。

やがて雑談の種も尽き、会話の間に空白の時間が生まれる。そろそろ朱華について聞こうと唇を開きかけたその時、僅かに早く胡嬪が口を開いた。

「ところで話は変わりますが、朱妃はこちらの宮女、朱華の妹御であられると伺っておりますが」

「え、ええ。その通りではありませんが、腹違いですし、親しくはありません。朱華が宮女になったことも、私は一切関与しておりませんから」

それを聞いた胡嬪はやはり石のように表情を変えずに小さく頷いただけだったが、当の朱華は紅を塗った唇を半開きにしてこちらを見てわなわなと震えていた。よく見ると隣にいる宮女が朱華の着物の袖をしっかりと掴んでおり、おそらくは私と話すな

とても厳命されているのだろう。

「率直に申し上げますと、本日はその朱華のことで参りました」

「ええ、伺っております。詳しいことを聞かせてください」

胡嬪は顎を引くように頷くと、後ろに立つ朱華を示した。

「こちらの朱華は、朱妃と血を分けた姉ということもあり、妹に傅き薫春殿で働くのは気まずいだろうとわたくしの石林殿の宮女にいたしました。ですが常々仕事の手を抜きがちで、こちらでも少々持て余しております」

そこまではなんとなく納得がいく話である。朱華はとにかくお嬢様育ちで、蝶よ花よと周囲から甘やかされてなんでもやってもらっていた。いざ働くにしてもどうすればいいかなど分らないのだろう。そのくせ気位ばかり高いから、誰かに聞くことも出来ず、なんとなく見様見真似で済ましてしまう。結果、どの仕事も出来が中途半端になるといったところか。

「それでも、一度引き受けたのですから責任を持つて教育しましたし、不幸続きとのことで朱家の方にも見舞金を送るなど、わたくしなりに心を尽くしてきたつもりですがしかながらわたくしの目の届かないところで、朱妃の姉という立場を利用していた

ようなのです」

胡嬪はそう淡々と続ける。まるで本を朗読でもしているかのようなつらつらとした言葉からは、胡嬪の感情は全く見えないまま。こちらもどう反応すべきか難しい。

「あの、それはどこから知ったのですか」

私がそう問うと、胡嬪は別の宮女を指し示した。

「こちらの宮女が、朱華からそういった内容を自慢話として聞かされたと、わたくしに報告して参りました」

話を振られた宮女は肩をびくりと震わせ、こちらに向かつてその通りだと言うようにこくこくと頷いた。朱華はそれを睨みつけるが別の宮女に肩を押さえつけられ、悔しそうに唇を噛んでいる。

「なるほど。それで、胡嬪は何故それを私に話そうと思ったのですか」

胡嬪は全く揺らがなく瞳のまま私を見据えた。感情が読めないので何だか人形のようだ。青妃のことも人形のようにだと感じたが、あちらは容貌が整いすぎて、いっそ作り物めいて見えるからであり、胡嬪はその感情の見えない無機質な口調と鉄面皮からそう感じるのであった。

「今話したことが真実かを、まず確かめたく思つてのことです。報告によれば、朱華は薫春殿の宮女を恐喝し、意のままに操ろうとしたとのこと。こちらに、朱華に恐喝された宮女はいますか」

恩永玉が僅かに肩を震わせた。

私は少し考えてから頷いた。

「います。その者は朱華から実家の商家を潰すとまで言われ、私に嫌がらせをするように強要されたそうです」

「犯罪教唆ということですね。その宮女は、まだ薫春殿にいたのでしょうか。もし、朱華に脅された通りに朱妃に嫌がらせをしていたのだらば、宮女の任を解かれ、放逐されていたとしてもおかしくはありませんが」

「まだいます。彼女は朱華に屈しかけはしましたが、それを私に打ち明けてくれました。私は罰を与え、彼女はそれをやり遂げたので、それでことを収めました。私の大切な宮女ですから手放すつもりはありません」

「そうですか、穩便に済んだようで何よりです」

「穩便に済んだとはなんですか！」

大きな声でそう口を挟んできたのは金苑であった。いつも冷静な彼女だが、大切な友人の恩永玉のことになると途端に頭に血が上ってしまうのだ。わなわなと怒りに震えている。

「お、落ち着いて」

「朱妃、落ち着いてなどいられません！ 全て恩永玉のせいになって、宮女を辞めさせられてもおかしくはありませんでした！ 恩永玉のご実家もその朱華に潰されるどころだったのですよ！ ちよっとした悪戯で済む話ではありません！ きちんと理解しているのですか!？」

金苑の激しい剣幕に、根っこでは気の弱い朱華は仰け反って一歩下がった。だが胡嬪は大岩のように身動きもせず、金苑をじっと見つめていた。

「失言したようで、申し訳ありません。その方が今もまだ宮女であるのなら、こちらからお詫びが出来る、という意味でございました。恩永玉、というのとはどなたでしょう」

「あ、え、えっと、私です……」

今日は珍しく負けん気を見せていた恩永玉だったが、それでも急に呼ばれて前に出

るのは戸惑うらしい。いつものおどおどした様子に戻ってしまった。

「石林殿の宮女がご迷惑をおかけしたこと、お詫び申し上げます。大変申し訳ありませんでした」

声色も表情も大きくは変わらないが、それでも胡嬪は高い身分でありながら、ただの宮女でしかない恩永玉に深々と頭を下げる。続いて周りの胡嬪の宮女もそれに倣った。朱華だけはふてくされた顔をして、気まずそうに目を逸らしている。

「失礼でなければ恩永玉のご実家への補償をさせてください」

「い、いえ、そこまでは……」

「いいえ、朱華はわたくしの宮女ですから。彼女の責任は主人のわたくしが取ります」固辞する恩永玉に胡嬪は何度もそう言い、恩永玉は遂にそれを受け入れたのだった。しかし話はこれで終わりというわけにはいかない。

「……ですが、朱華は恩永玉に謝ってはいませんよね」

謝れば済む訳ではないが、朱華は胡嬪たちが頭を下げて自分だけはそうしなかった。私がそう言うと、朱華はサツと怒りで顔を赤らめた。

「その通りですね。朱華、謝罪をなさい」

感情のこもっていない声でそう促され、朱華はしぶとばかりに頭を下げた。

「……すみませんでした」

全くそうは思っていないような顔で、下げた頭を上げるなり、私を憎々しげに睨んでくる。これはどうしようもなさそうだ、と思ったところで胡嬪が朱華の方を振り向いた。

「……朱華。それではいけません」

「で、でもちゃんと謝りました」

「そうですね。でしたらわたくしは貴方を庇うことを止めます。貴方は恐喝及び犯罪教唆の罪に問われることになります。もう宮女ではいられませんし、それらの罪でしたら、おそらくは良くて鞭叩きの刑でしょう。男の刑吏の前で裸にされ、何十回も鞭で叩かれます。背中中の皮膚は裂け、途中で息絶えることも少なくありません。そうして体力が落ちれば感染症にかかる確率が高くなり、高熱が出て生死の境を彷徨い、生き残ったとしても生涯消えぬ傷が残るでしょう。——それで、お許しただけですか?」

最後の一言は恩永玉に向けてであった。恩永玉は鞭叩きという言葉に、自分が叩か

れるわけではないのに真っ青になってしまっている。私も聞いているだけで血の気が引きそうだった。胡嬪の淡々とした話し方はこんな時には恐ろしさが増すらしい。それ以上に、朱華は突きつけられた現実に真っ青になり、ガクガクと痙攣でもするかのように震え始めた。

「もっ、申し訳ありませんっ！ 胡嬪！ どうか……！」

「謝るのはわたくしにはではないでしょう」

その言葉を聞くと否や、朱華は恩永玉の前に跪き、涙をはらはらと零した。その様子はさすがに朱華といえども演技ではない。

「申し訳ありませんでした……！ どうか、どうかお許しを！」

「え、ええ、あの、立ってください」

「許してくださいならなければ立てません！ どうかお許しください！」

「ええと……しゅ、朱妃、どうしまししょう……」

「恩永玉の好きなようにしていいわよ」

朱華は私の姉ではあるが、今回の被害者は恩永玉だ。

恩永玉もそれを聞いておすおすと頷いた。

「で、でしたら私は許します。その前に、誰かを脅したり、もうこんな酷いこと、二度としないと約束出来ますか？ それから、血が繋がっているからといって朱妃に迷惑をかけるようなこともです」

「はい、約束いたします！」

「じゃあ、許します。立ってください。顔も拭いてください」

「ああ……ありがとうございます！」

恩永玉は懐から手巾を出して朱華に渡した。朱華はそれで顔を拭くと涙と冷や汗でドロドロに溶けた化粧がひどい有様である。涙みに憑かれた朱華に恩永玉が密着していたから少し心配だったが、恩永玉は大丈夫のようだ。

それでもようやくこれで朱華のことが決着したのだとホッとした。だが、胡嬪は朱華が謝る姿にも心を動かされる様子はなく、何の感情も浮かべない石のような瞳でただ静かに成り行きをじっと見ているだけだった。その眼差しは何を考えているのかわからず、ひどく薄気味悪い。

「では、許しは得たようですので、朱華には罰を与えます」

ようやく口を開いた胡嬪はそんなことを言った。

「……そんな……」

朱華はまた真つ青になって震えている。

胡嬪のその言葉に、決着がついたと思つたのは気のせい、最初から胡嬪の意のままの茶番でしかなかったのだと、私はこの時ようやく気が付いたのだった。

「わ、私は謝りました！ 恩永玉も許してくださいと！」

朱華は半狂乱になりながら自己弁護をしている。

「そうですね。朱妃側への対処はそれで済んだかと思えます。よろしいでしょうか、

朱妃」

突然こちらに話を振られ、私は戸惑いながらも頷いた。

「え、ええ。恩永玉にも謝ってくれたし、本人も反省しているのなら……」

「はい。ですので、あとはこちら側の問題、石林殿の面子を潰したことへの罰です。

ご存知かもしれませんが、わたくしの立場はあまり良いものではありません。皇帝陛下の愛妃たる方に楯突いたと、万が一にも思われてはなりませんから」

そういうえば汪蘭が言っていたはずだ。胡嬪は十年前、雨了側ではなく当時の王弟側についた武官か何かの娘だったはず。その後、人質として後宮に入ったのだと。

思えば、これまで朱華はともかく、胡嬪本人はたまたま行き合つた時を除けば私に接触しようとしなかった。今回のことも、私の不興を買わないよう私と朱華の間柄を確認してから話を進めてきた。朱華にやたらと厳しい対応なのも納得できる。私が朱華への情が薄いと判断したからこそその厳しい罰なのだ。

その石のように感情の見えない態度も、やけに地味な着物も、それが彼女を守る鎧なのかもしれない。彼女の複雑な立場であれば、愛妃の私に楯突く行為は皇帝陛下に反旗を翻すと思われてもおかしくない。血縁者の朱華を焼き付けてやらせたのだと、そう思われないうにわざと厳しくするしかない。そんなところだろうか。

「胡嬪！ お願いします！ もう致しませんから！」

「もうしないのは当たり前前の話です。さて、どんな罰が良いでしょうか」

「はあい、胡嬪、やはり鞭で叩きましょう！ 女の細腕ですもの、刑吏に叩かれるほどの怪我にはなりませんでしょうか？」

そう言つたのは、それまで黙っていた胡嬪の宮女の一人である。朱華以外に淀みに憑かれている宮女で、塗り固めた厚化粧の彼女は甲高い声でケタケタと笑いながらそう言つた。その悪辣な雰囲気はまるで以前の朱華のようだ。

「いいえ、鞭は打つ方も腕が疲れますし大変です。爪を剥ぐというのは？」

「うふふ、痛いののは可哀想ですわあ。ですからあ、頭を丸刈りにしましょう！」

しかし他の淀みに憑かれていない宮女までそれに賛同し、残酷とも言える案を嬉々として出し始めた。彼女たちはクスクスと楽しげに声を上げて笑っている。朱華はそれを聞いてわあっと泣き声を上げた。無理もない。仲が良かったかは知るよしもないが、それでも同じ宮殿の仲間のはずだ。なのにこれではまるで公開処刑だ。

「そ、そこまでしなくても。わ、私は水汲みと草むしりを一週間という罰でした。朱華もそれくらいで良いのではないのでしょうか」

さすがに哀れに思ったのか、恩永玉がそう申し出た。あれだけ怒っていた金苑ですらそれに頷く。水汲みも草むしりも、一人でやるのはかなりきつい仕事だ。言うほど軽い罰ではない。

しかし、胡嬪は全く表情も変えないまま言っただけだ。

「いいえ、それを科したところで朱華はろくにやらす、平気で出来ませんでした、無理でした、とメソメソ泣いて終わらせようとするでしょう。仕事が出来ない宮女に、罰で仕事をさせようとするのはあまり得策ではありません」

確かに朱華が言いそうなことだ。一週間と区切れば、それまでを適当に済ませてしまえば罰は終わるのだと朱華なら思うかもしれない。水汲みは必須なのに、重くて出来ませんでしたと朱華が汲まずに放っておけば、誰かがその分を肩代わりしなければいけなくなる。結局大変なのは周囲だ。

「それに石林殿には草の生えた庭はほとんどありません。その名の通り、石の林……砂利を敷き、形の良い大岩や原石などを並べてあるのです。薫春殿のような緑豊かな庭と違い、萐る草も生えてはきませんから、そもそも罰になるほどの仕事にはならないのです」

「石とは言ってもとても趣があつて素敵なのですよ。鳥や獣の剥製なんかも置いてあるのです」

「ええ。水晶や玉石の原石だから、それぞれ色味が異なるのです。南国を模した縞模様、石に、青や黄色の鮮やかな鳥の剥製を止まらせている様子はそれはそれは美しく……」

「様々な地域から集められた石なのだそうです。本当に素敵な石庭なので朱妃にも一度ご覧になっていただきたいですわ」

「へ、へえ、そうなの……」

それまで静かにしているか、嬉々として残酷な罰を出す以外殆ど喋らなかつた胡嬪の宮女たちが、興奮した面持ちで口々に石林殿の自慢を始める。うっとり頬を赤らめて言うことが庭の石の話というのは何だか不思議であるが、胡嬪からして風変わりなので、宮女も相応に変わっているのかもしれない。

そんな中、朱華だけは真つ赤な目をしておどおどとしていた。話は庭のことへ移つてしまつたが、朱華はいつ酷い罰を言い渡されるかと、生きた心地がしないのだろう。「……脱線はそれくらいにしておきましょう。石林殿の庭よりも今は朱華の罰のことです」

胡嬪がそう言えば宮女たちは恭しく頭を下げて口を閉じる。朱華だけはひいっと声を上げて震えた。

「出た案は鞭打ちに爪剥ぎ、ああ丸刈りもありましたね」

「い、痛いのは嫌です！ どうかお許しください……」

恐怖に顔を引きつらせ、自慢の黒髪も振り乱している。

「朱華、本当に反省したのですか」

「はい、しました！ ですから、どうか……」

「では、その自慢の髪を切りましょう。丸刈りとまでは言いませんから安心なさい」

「え……髪、を……？」

さあつと青ざめていく朱華。私からすれば鞭で叩かれるのや爪を剥がされるのに比べればずっと軽い罰だと思えるのだが、朱華はその長く伸ばした黒髪をとにかく大切にしているのだ。朱家にいた時からずっと、毎日髪の手先まで手入れを欠かさず、黒く艶々とした髪を保っているのを私は知っていた。

その髪を切れと言われて、痛い罰よりは良いかもしれないが、今度は欲が出てきて躊躇う気持ちになつたのだろう。

朱華は震えながら、助けを求めるように私を見てくるが、さすがにこれ以上は無理だ。血の繋がつた私の姉かもしれないが、私の宮女ではない。そもそも朱華は加害者なのだ。ここで助けるのは甘やかすだけだ。髪であればまた伸びるし、死ぬわけではない。「……朱妃、わたくしは大切な宮女に対してここまでするのは、どうか石林殿は皇帝陛下に叛意ありと思わないでくださいませ。わたくしは……ただ石のように静かに、平穩に生きたいだけなのです」

胡嬪は静かに淡々と、今までとまったく同じような声色でそう言った。

「え、ええ……」

「朱華にも理解してもらわねばなりません。わたくしは愛妃たる朱妃とは違うのです。皇帝陛下に愛されることなど絶対にはないわたくしには、石のようにただ静かに生きることのみが許されるのです。それはこの後宮にいる者全てが同様です。朱妃だけが特別であり、順序すらなく、愛されるのは最初から最後までたつたお一人だけなのです。血を分けた姉である貴方とて例外ではありません。それを身を以て分らせるため、わたくしは貴方の大切な髪を切るのです」

「……はい……」

私は愛妃、龍の番だ。胡嬪の言葉はことさら胸をチクリと刺した。

「本来は皇帝陛下から——雨了から愛される存在だ。けれど、私の手には雨了の鱗はない。どうしてもあれを手に入れなければならぬのに。今のままでは私は未熟な愛妃ではない。なのに周囲からは愛妃として扱われる。今の私の何が朱華や胡嬪と違うのか。私だって、朱家にいた頃には義母を恨み、朱華を羨んでいたし、ただ祖父の形見に囲まれて静かに暮らしたいと思っていたのに。」

見ればいつの間にか朱華は静かに泣いていた。先程までのように派手に騒ぐでもなく、縋り付くでもなく。感情の見えない胡嬪のように、物言わぬ石のように、ただ静かだった。

「——というわけだったのよ。会っている時間はあまり長くなかったけど、本当に疲れたわ。青妃以上に変わっている方ね」

「まあそうでしたか。朱妃、お疲れ様でございます」

「じゅうつ」

汪蘭と、私の膝に乗ったろくが労ってくれる。

胡嬪たちはその後、朱華の髪を切るために帰って行った。髪を切るには刃物が必要だが、彼女達が持つてきているはずもない。薫春殿としてもさすがに刃物を貸すことは避けたかった。

切り終えた髪は薫春殿に持って行きますと言われるが固辞した。一度見せにだけは来るらしいがそれも遠慮したい。というか石林殿は胡嬪も宮女も風変わりなので避けたい。

私は息抜きを兼ねてろくと遊びながら、つい汪蘭に愚痴ってしまう。

「だからなのでしょうか……。胡嬪の着物、あれは一見すると地味な灰色ながら、とても凝ったものでした。同色で細かな刺繍がびっしりされていましたし、裏布は鮮やかで翡翠ひすいの原石を模していたのかもしれませんが」

「あら、汪蘭てばいつのまに見たの」

「ええ、実は気になって……。こっそり覗のぞいてしまいました。あ、お帰りの際に一瞬だけですよ！」

「全然気が付かなかったわ」

汪蘭は案外好奇心旺盛なのもかもしれない。

そんなことを思いながら私は疲労を回復させようと、ろくの柔らかなお腹なかを吸い、六本の足でやんわりと顔を蹴られたのだった。

第二章

昼より夜、それよりも寝る時が一番寂しい。

両手両足を投げ出しても余りある広い寝台に、今夜も雨了はいない。遠い馬理に向かっているのだから、まだしばらく帰ってこないのは理解している。それでも今まではずぐそばにあった雨了の温もりが恋しかった。

温かい胸元に額を押し当てて眠りたい。ぎゅうつと強く抱きしめてほしい。

「……雨了に会いたいな……」

手を伸ばしても触れるのはひんやりとした絹の寝具だけ。

目を閉じてる間に雨了が帰ってきていたらいいのに。

後宮に入り、雨了が来るまでは一人寝を寂しいと思ったことなどない。なのに雨了が留守にした途端、こんなにも寂しさが募たもってしまう。

決して寒いわけじゃないのに、寒々しく感じて身を縮める。

「雨了……今、どこにいるの……?」

雨了に会いたい、今すぐそばに行きたい。せめて夢で雨了に会えたらいいのに。そればかりを考えて私は眠りについた。

ふと気がつく、私は見知らぬ場所にいた。

白っぽい天幕が張られている。砂埃の匂いに混じり、油の燃える匂いがしていた。天幕の外からはたくさん人の気配。たくさんの人たちが焚き火を囲み、小声で語らっている。そのざわざわした音はまるで潮騒みたいだ。

——何だか不思議な夢。

そう思ったのは私が立っていないからだ。

ふわふわと空中に浮いている。ふと気が付いた瞬間には横になって浮いていたが、体勢を変えてもまだ浮いたままで足が地面に付かない。手を翳すと後ろの景色が透けて見えた。さすがにこれでは現実と思えない。

ここがどこだか知らないが、夢の中で夢だと意識して動けることはそうそうないだろう。少し楽しくなってきた私は、空中を泳ぐみたいにふわりふわりと移動を開始した。

こつちだ、となんとなく思う方へ向かう。

立派な鎧姿の近衛兵が置物のように突っ立っている。私の姿は見えないらしく、目の前で手をヒラヒラさせても無反応だ。

私はすぐに飽きて更に奥へと進む。

(多分、こつちに……なんだっけ。すつごく大切な……)
何かを求めてひたすら進み、私は奥の方に目を止めた。

(……そっか、雨了だ)

天幕の一番奥、薄い紗で仕切られた中央には雨了がいた。

いつもより簡素な格好の雨了はもう寝る支度を済ませたらしい。長い艶やかな黒髪はほどかれて、その背をさらさらと流れている。

静かに俯いた雨了は手元の書物を読んでいた。微かにパリリと頁を捲る音が聞こえる。夢でも悔しいほど綺麗な顔だ。一人でいる時の雨了は当たり前だが何の表情も浮かんでいない。いつもうるさい口も閉じている。ただただ整った顔に見惚れた。

(まるで本物みたい)

夢でいいから会いたいと、そう願ったからだろうか。